『随想録』より抜粋

48　一念の信

今は昔、私が大正十三年八幡市の敬行寺に入寺して、翌年三月の彼岸に初めて自坊布教をした。新発意の布教と言うので続々参詣して下さったが、有難い事は言わず、深刻に実機に肉迫して行った。大部分は信仰が崩壊してしまった。この人達は私に因縁の深い同行だから、大満足の境地まで導かなければならないと自覚させられた。その後人々の帰依を得れば得る程、多方面からは異安心だ　く　と烽火を挙げられた。私が異安心なら正常の安心を生命がけで宣伝すればよいのに、自分達は一句の法門も説き切らず、大酒飲んで騒ぎ立てているのだから世の中は面白い。

遂に衆僧の意見を纏めたのか管事一人の意見か知らないが、父の処に故障を申し込んできた。父がその手紙を私に見せて、お前は信心を戴いた人を連判状に載せているかい―。　いいえ、上から見て判りますものか―。　それなら何故こんな手紙が来たのだろう―。　それは本堂で遠方から参詣した人の住所姓名を日記帳に書いた事があるからそれかも知れません―。　成程それを見ていたのだな、それなら信一念を説き過ぎると言っているが、一念が判ると言って教えるかい、判らぬと言って教えるかい―。　判る人には判る、判らぬ人には判らぬと教えます―。　それなら一念の時が判ると教えるかい―。いいえ一念の味が判ると教えます―。　時は判らないかい―。　一念の実時は仏智の早業だから分秒に掛からないし、生命懸の時だから時計など見ていないから判らないが、苦悩の心が消除させられた後の満足さから仮時なら判ります―。　判らにや参れんかい―。　判らにや参れんかと言う正因ではなく、参れる事が決まったら味が判り、味の判った人間なら仮時なら判ります―。　よしよく

判った、返事を出して置いてやろう。―一週間位の後に謝りの手紙が来た。

これを見よ。どんなに出されましたか―。それはね、㈠　信心を戴いた者を連判状に書くと言っているが、連判状を見たか。遠方の同行の住所姓名を日記帳に書くのが何故悪い。

㈡　信一念を説き過ぎるといっているが、蓮師は八十通の御文に六十回余りも一念　く　と仰せられてあるが、あれは説き過ぎではないか。何回までは説き過ぎでなく、何回以上は説き過ぎか、その境を判明言え。私が見た処では新発意の信仰に間違いはないから、田舎の方で愚図愚図言わずに、本山の監正局に届けて議論せよ。解決がつかなければ俺が行く。一念をはっきり説くのが何故悪い、新発意が一念の時が判ると一度でも説いたのを聞いた事があるか。名号を諦得させた一念の信の味が判らなくて真宗と言えるか。成就の文には「聞其名号信心歓喜乃至一念」と説かれ、「この一念をもっては娑婆のおわり臨終とおもへ」

「これを知らざるをもって他門とし、これをしれるをもって真宗のしるしとす」と仰せられたのは時刻ではないぞ。味が無いのは摂取されていないのではないか。真宗にたのむ一念の味を説かなくて何を説くのだ、と手紙を出したのだ。―そうでしたか。と話した事があるが、聞即信の一念に八万の法蔵を読破さして戴くのだから、念を入れてお聞きなさいよ。

人々には我執が有る為に、自分の進んでいる程度以外は皆異安心と判断してしまう癖が有るから情けないが、真仏土巻に、

真仮を知らざるによりて如来広大の恩徳を迷失す

と、又化身土巻に

然るに諸寺の釈門教に昏くして真仮の門戸を知らず、洛都の儒林行に迷うて邪正の道路を弁ふることなし

と、又御和讃には、

念仏成仏これ真宗　　万行諸善これ仮門

権実真仮をわかずして　　自然の浄土をえぞしらぬ

と仰せられてある。真仮が何やら知らずにいて布教されては、信前信後の区別も立たず、調熟と摂取とを初めから混乱していては、法門が混乱するのは当然だ。

一念の覚不を論ずる事は御裁断の御書に禁じてあるので時間に用事は無いが、一念の信の解決がつかなかったら、唯信独達の浄土真宗ではないのだ。

何時とはなしに信心を戴くと言う人も、一念の信が無くてよいと言うのではないのだ。はっきりすると言う人も時刻が判ると言うのではないのだ。その人の立場でそれより他には考えられないのだから固執してはならない、皆本当なのだ。

㈠、七里和上にある方が、信心戴いたと言う事が判るものでしょうか、判らないものでしょうかと尋ねられた時、和上はそんな事に用事が有るものかい、唯不思議の仏智に摂取された事を慶べと言うお気持ちから、時刻の早業は判らないよ、何時風邪を引いたか判らないが、嚏が出たり鼻水が出て来るので、風邪を引いたなあと知らさるるのだ。―それなら風邪ひき安心ですねとやった。すると頓智のよい和上だから、それならここに品物が有った、あらもう無くなった、泥棒に盗られたのだなと言うように判然判るかい。―　それは判りますとも。―それなら泥棒安心だなあ、と言われたと。一念の話になると、百人が百人この話をされる。風邪引き安心とは何時とはなしにと言う方であり、泥棒安心は一念をはっきりと言う方に当たるのだが、人々は風邪引きと言う時には静かにしているが、泥棒安心と言う時にはどっと笑う。名前が悪いから笑うのであろうが、その中には自ずから、覚は誤りで不覚がよいのだと賛成した形になるのだ。して見ると覚を論ずる事も悪いが、不覚を論ずる事も悪い

のだ。真宗では何時とはなしに信心を戴いたと言う事は御聖教には無い事だ。何時とはなしは調熟の光明の分際であり、一念の解決が摂取不捨された時の味である。若しも七里和上が何時とはなしに往生が決まると仰ったとすれば、仮令七里和上でも法龍は反対する。何故かと言えば御伝鈔に

たちどころに他力摂生の旨趣を受得し、あくまで凡夫直入の真心を決定しましましけり。

と仰せられ、成就の文には

聞其名号信心歓喜乃至一念

が真宗の根本であり、改邪鈔には

それについて三経の安心あり。そのなかに大経をもって真実とせらる。大経のなかには第十八の願をもって本とす。十八の願にとりては、又願成就をもって至極とす。信心歓喜乃至

一念をもって他力の安心とおぼしめさるるゆえなり。この一念を他力より発得しぬるのちは、生死の苦海をうしろになして涅槃の彼岸にいたりぬる条、勿論なり

と仰せられて、一念を抜きにしては真宗は成立しないのだ。信楽開発すれば一念に用事がないのだと言わるるかも知れないが、勿論開発すれば、書く事も話す事も語る事もいらないのだ。信前の者が信後の真似して平気でいるから、一念の水際を明らかに語らして戴くので、時間に用事はないが、開発の一念の味がなければ真宗の行者とは言えないのだ。

(二)　柿が熟柿になるのは何時とはなしではないか。一時に渋が取れるものかい。信仰を戴くのも何時開発したと言う事が判るものかい、と平気でいる人が大多数だが、それでは信前信後の水際、真仮の分際は何処で立つのだ。熟柿になるのは何時とはなしだが、眺めているだけでは自分の腹に入らないぞ。喰いついた時が一念の味ではないか。お育てを蒙るのは、何時とはなしに聞かされて有難くなるが、総ての望みが尽きて、真実の機が照らし出された

時でなければ、自力の機執は捨たらないのだ、捨たった時でなければ、摂取された一念は味わう事が出来ないのだ。何時とはなしとは誰が言い出した言葉だ。何時とはなしでは何時決定するのだ。―　自然だから判らない。判らなくて安心が出来るかい。「たちどころに他力摂生の旨趣を受得し」と言われ、「三世の業障一時に罪消えて」と仰せらるるのは、何時とはなしに消えると言う事か。調熟の光明と摂取の光明の、信前信後の区別を知らない人の言う言葉ではないか。

㈢　太陽が昇るのは何時とはなしではないか。一度に夜が明けるものか。信心も何時とはなしに疑い晴れるのだと言っているが、太陽は何時とはなしに昇るとして、太陽を名号に譬えたのであろうが、それなら名号は何時とはなしに正覚を成就されるのか。初めから法と喩が合わないではないか。名号は十劫の昔に正覚を成就してあるのだから、太陽は既に中天に輝いているので、何時とはなしに昇るのではないぞ。罪は法になく、機に有るのだ。無明の酒

に酔いつぶれている処を知識に呼び起されて、未だ早い、夜は明けていないではないか、と強情張った機が、ぐずぐず言っている時が調熟の分際で、あらあらこんなに寝過ごしているとは知らなかったと気がついた時が一念の信の時なのだ。

㈣　一俵を荷うた男が有ってその俵の底を鼠が噛っていて、たらたら米が抜けて落ちて何時とはなしに軽くなるように、信心も何時とはなしに罪や障りが取れて安心の身に成るのだと言っているが、暇に任せて色々考えたものだ。誰の話をしているのだ。各自が荷い切れない一俵俵を荷うた程に業障の重さに驚いて心配した事があるのかい。又段々軽くなったなあと、まだ少し残っている米俵を荷うているのかい。聖人様は二十ヵ年の修行も、百夜の祈願も総てが間に合わず、定水を凝らしても真月を観じようとしても、妄念より他にないと見限りがつき、投げ出した儘が摂取された心安さに大満足されたのであったが、何時とはなしと言う事が聖人様の上で言えるか。聖人様が出家得度から開発の境地までは何時とはなしに育

てられて来られたが、開発の一念は立ちどころであったのだ。

道俗よ初めから信後の真似をしているから、真の求道がないのだ。真の求道が無いから疑雲が見えないのだ。疑雲が見えないから開発の天地が諦得出来ないのだ。出来ないから何時とはなしと言うより他に言いようがないのだ。溺れていた人が助けられた時、何時とはなしに助けられたと言えるか。停電で困り抜いていて、点電した時何時とはなしに点いたと言えるか。斥候に出て戦死したのだろう、十日にもなるが帰還しないからとの報で泣いている時「ブジキカンシタ」と来電した時、何時とはなしに安心したと言えるか。

後生が一度位一大事に成ったかい。死後の話ばかり聞いて、成って来いとは仰らないと罪悪を包む稽古ばかりして、死にさえすれば往生とやっている人に、一念の味が判るものかい。それで死後の往生を楽しむ者は何時とはなしの安心で満足し、平生業成を諦得したいと求める者は、一念がはっきりしなければ承知が出来ないのだ。その人の立場立場で説を立て

争(あらそ)っているのだ。これも大海(だいかい)の妙波瀾(みょうはらん)だから面白(おもしろ)い。最後(さいご)にはそんな言葉(ことば)に用事(ようじ)がなく、唯(ただ)念仏(ねんぶつ)するより他(ほか)に道(みち)がないのだ。